

スタッフナースの悩みに 耳を傾けていますか

看護管理者の立場にある人なら誰でも日々、いろいろな人から悩みを相談される機会が多いだろう。先日もあるスタッフナースから今の病棟でやりがいを見出せないと相談され、自分のアドバイスはどうだったのかなと考えているときに手にしたのが本書だった。

本書は『看護学雑誌』に2年間連載された内容をまとめ直したものであり、24の異なる悩みを紹介し、それに対して著者がコメントするという形式になっている。24の悩みは、例えば「患者さんの死にたいをどう受け止める?」「患者さんからセクハラ」「聞く耳もたぬ医師やキレる医師」など、ナースなら一度は経験したことがある話ばかりであり、クスッと笑いながら一気に読んでしまった。

一方で「心に闇を抱える私が、ナースであってもいいですか?」「どうでもいいナースコールにやさしくなれません」など、ナースとは本当にまじめな人種だと再認識する話も多い。そうした私たちが抱え込みがちな「ナースとはこうあらねばならぬ」「こうするはずだ」という呪縛を著者は実に客観的に整理し、解きほぐしてくれる。しかし、突き放され理解されないという感じもせず、かつ理想論でも終わっていないのは、著者自身も同じようなことで悩み、1つひとつの悩みについて20年を超える経験を語りながら

進んでいるからであろう。

先に述べたスタッフナースの悩みでは、職場にその悩みを話せる人がいないという。その人に限らず、休職や離職につながるケースでは、そのプロセスで悩みを相談する人がいなかったり、誰に話すこともなく、いきなり心療内科にかかるというパターンが増えているように思う。そしてぐだぐだ悩む間もなく、結論を出すのが早くなっているように感じられる。新人研修では新人同士で悩みを話し合う交流会の場を設定する病院が増えているが、これも職場で悩みを話せない人が増えていることの表われだろう。

自分の経験をいかに織り交ぜ アドバイスするか

本書を読み、職場の上司や先輩、同期仲間が著者のように自分の経験、なかでも自分の失敗や反省を素直に語りながら、悩みを聞き一緒に悩むことが必要だと感じた。自分の経験を語ってアドバイスをすることは、相手にたいへん大きなエネルギーを注ぎ込むものである。

本書は同じようなことで悩んでいるナースの頭を整理してくれるだけでなく、悩みを相談された上司や先輩、あるいは予想もできないほど純粋な質問を実習生から投げかけられ、とまどう実習指導者にとっても自分の経験を織り交ぜながら悩みにどう対応していくかという点でたいへん役に立つ一冊である。



看護師専用 お悩み外来

宮子あずさ 著
定価 1680 円
(本体 1600 円 + 税 5 %)
医学書院
TEL. 03-3817-5657

スタッフナースの悩みの相談に とまどう管理者のために

中根 薫 近畿中央病院副看護部長

評
BOOK